M 情報　2026/4

蹄管理特別セミナーを終えて

阿部

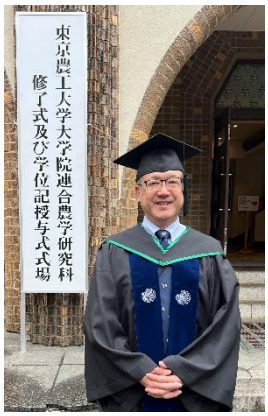
ドルテ・ドーファ先生を迎えての特別セミナー週間を終えました。この一連のセミナーは帯広、別海、酪農大の３会場で、それぞれ 100 名の参加を頂きました。日本全国のドルテ・ファンもやって来て、とても盛況でした。その他、合間の２日間は THMS のための日程を取り、みっちり実習と講習をしていただきました。おかげで牛に対する近づき方、そっと歩かせながら足元をよく観て、DD:趾皮膚炎のグレードを観察する方法（ペンウォーク）を実地の農場で行うことができました。また、他の農場ではスリップの状態や、削蹄の状態を細かく見ることができました。また、ある農場では実際の削蹄師さんに、過形成のキワをなだらかに処理する方法を直接指導していただきました。「専門家という人はここまでやるのか・・・」をまざまざと見せつけられた思いです。良い勉強になりました。「THMS の獣医師全般、非常にアグレッシブ」と、高評価をいただきました。また、酪農大会場ではセミナー後に、久津間削蹄師による日本の伝統的削蹄（削蹄者自身が保定する）の実演が行なわれ、牛と人との協調に対して大変感銘を受けられた様子でした。というのも、先生は、ペンウォークにも通じるのですが、牛のことを大変優しく扱われる方でした。そして、普段から優しく扱われている牛とそうではない牛の傾向は、蹄病にもつながることを力説してくださいました。例えば、「白帯病（白帯離開）」は、スリップとか急なターンで発症することが分かっています。ですから、通路上に１m以上のスリップ跡を多数見つけると、群の安定、日常の牛のハンドリングに問題ありと指摘されていました。他にも、コンクリートの摩耗（目地の広がり／コンクリートの破損）について、通路もパーラーも詳細にチェックされていました。その解説を聞きながら、私は「白帯病の模式」について考えておりました。

地面に座って・・・目地の幅が２cm 以上だと、蹄が捻れ白帯病のリスク。

バナナの白帯病

ところで、最近、急速に牛の扱いについて「動物福祉に照らしたハンドリング」とか、「アニマル・ビーイング（牛のあり様を考慮する）」といった概念が、消費者目線で現実的に必要不可欠とされている状況が迫ってきているようです。欧州では動物福祉には罰則規定があります。米国でも、同様な規定が導入されつつも、より上等な牛の管理がなされている農場からの乳は高値で取引されています。

改めて、「動物福祉」は「動物愛護」とは違います。「あくまで家畜としての牛を前提に、その牛に可能な限り幸せに生きて頂く」ことだと解釈できます。ですから、牛が嫌がること「急かされる・驚かされる・痛いことをされる」ようなことはしないように・・・かくいう私も獣医師として今まで普通にやっていたことを反省する毎日です・・・確かにもっとお互い楽に行うことは可能なのです・・・下の写真を見て下さい。欧米には旗竿（上)や、ガラガラ音がするパドル（下）が売られているようです。そこで、塩ビのバットのグリップに、消防ホースを 50cm 付けた「痛くないムチ：“ペシコ”」を作ってみました。常にペシペシやるのではなく、通常はヒラヒラさせるだけです。　　それで十分！　あとは、急がず待つ事を覚えましょう！



おかげで取れました
ありがとうございます